

Japanese Association of Trombonists

JAT NEWS

第 50 号

日本トロンボーン協会会報 2000.1 発行

事務局：〒112-0013 東京都文京区音羽2-2-2-603 プロアルテムジケ内 tel. 03-3943-6677 fax. 03-3943-6659
郵便振込：日本トロンボーン協会事務局 東京 9-175867

2000年トロンボーンフェスティバル&アカデミーへのお誘い

多くの優秀作品が出そろうトロンボーンフェスタ同時開催

西暦2000年3月18日から20日までトロンボーン協会主催トロンボーンアカデミー&フェスティバルが開催されます。アカデミーでは初心者から上級者までレベルに合った受講ができるように配慮しました。各講座を2名から3名の講師が担当し、同じ講座の中でもアンサンブルでガンガン吹きこむグループと個人的な問題解決をするグループが互いに行き来し同時にできるようにしました。「せっかくだからたくさん吹きたいが欠点も直して帰りたい」というみなさんのご希望にぴったりです。また成果の発表の場として最終日(20日)に発表会を行います。グループで参加した方はそのままのメンバーで準備した曲を演奏していただけますのでセクションでの参加も楽しいと思います。発表会の最後はジャズクラスで講師も交えたジャムセッション。その後はお約束の懇親会。一杯のみながら(成人のみ!)他の団体や、地方のトロンボーン愛好家と交流を図るもよし、講師陣とトロンボーンバトルをくりひろげるもよし、当日のお楽しみ。

コンサート「トロンボーン・フェスタ」はちょっと変わってます。日本現代音楽協会とタイアップし、昨年一般公募されたトロンボーンのための新作を発表します。編成はソロから12重奏まで。やさしく楽しめるアンサンブル曲から前衛ばかりはアヴァンギャルドまでバラエティーに富んだ内容です。海外にも脚をはって紹介できる名作が初演されること間違いなし。N響の神谷 敏氏や日フィルの箱山 芳樹氏など日本を代表するソリストが出演し「ガラコンサート」ならではの贅沢な聞き比べをお楽しみいただけます。音大の若い学生さんやアマチュアのグループにも演奏していただきまして、これを機会に新しい作品に興味をもっていただけることを期待しております。

アカデミーの参加申し込み、コンサートの詳細、チケットのお問い合わせなどは別紙のチラシをご覧ください。

第6回日本トロンボーン コンペティション開催される

中学生も入賞。向上する演奏レベル

1999年11月14(日)洗足学園大学溝ノ口キャンパスにて第6回日本トロンボーンコンペティションが行われました。発足当時財政面やその他諸般の事情で続行が危ぶまれたこの催しも関係各位の熱い思いと献身的な実行力と理解あるバックアップの賜物により今日を迎える事が出来ましたことはご同慶の至りであり、深く感謝いたず次第であります。それにしましてもこの6年間一人の豪傑者もなかつたことは志願者の方々の並々ならぬ真剣さを物語っておりここまで続けてきた甲斐があったと一同喜んでおります。

さて今回は特に地方からの参加が目立ちました。鹿児島、岡山、広島、鳥取、京都、山口、愛媛、石川、群馬、茨城、の各県から合計16名。東京、神奈川、千葉、埼玉の合計が16名でした。そして結論的には1位には鳥取の木下靖子さん、難易度の高い曲を軽々と演奏され驚きました。2位は鹿児島県の山下友輔君、まだ中学生なのに立派な演奏でこれまた驚きです。3位は神奈川県の清水真弓さん、再度の挑戦でおめでとう。奨励賞は山口県の田村美里さんと神奈川県の大田雅士君、結果のところ3対2で地方勢が優勢でした。一極集中的だったトロンボーンのレッスン事情も優秀かつ熱心な先生方が全国的に誕生しました先生の層も世代交代が始まっています新しい音が生まれつつあるように見受けられました。私事になりますが1999年の9月にフランス・グブヴィレールで開催された国際トロンボーンコンクールを10日間かけて審査をしてきました。まだ耳に外国の音が残っているうちただただけに今回の日本の

フレッシュな音が聞けることが大変楽しみでした。いざふたを開けると楽しみは前出のように驚きに変わりました。まず誰もが平均的にリズムがよくなつたこと、聞いていてスピードが出てきたこと、餅の上を牛が歩いているような演奏がなくなったこと、次に音量が出てきたこと、音楽造りの中で爆発、すなわち精神的発露が見られるようになつたこと、音楽全体に抑揚が出てきたこと、聞いていて面白くなってきたこと、等々完成品にはまだほど遠いが将来楽しみな人たちが大勢現れたことは大変喜ばしいことでした。志願者各位に渡す講評のメモに「あなたたち素晴らしいけれど、若いあなたにとって大変な難局をこのように吹けるようにしてくれた先生はもっと素晴らしいよ いい先生にめぐり会えて幸せだね」と走り書きしました。日本のトロンボーン界に新しい風が吹き始めたような気がしてなりません。最後になりましたが 15 年間日本トロンボーン界を温かく見守り続けているミシェル・ベックさんが忙しいスケジュールの合間を縫ってゲスト審査員として駆けつけ、またため息の出るような演奏もお願いでき、御礼申し上げます。ベックさん曰く「日本人の進んでいる道は間違っていない、このまままっすぐ進んでいいって欲しい」と。皆さん！もう少しの時間で世界の検舞台に飛びだす日が来ます。お互い頑張りましょう。

第6回日本トロンボーンコンペティション
審査委員長 永渕幸雄



●コンペティション結果●

- 第1位 木下 靖子（鳥取県米子西高等学校）
セロッキ「ソナチネ」
第2位 山下 友輔（鹿児島市立吉野中学校）
ギルマン「交響的小品」
第3位 清水 真弓（鹿児島市立吉野中学校）
ボザ「バラード」
奨励賞 太田 雅士（桜美林高等学校）
シュテッキヒト「ソナチネ」
奨励賞 田村 美里（山口県立防府高等学校）
ルソー「協奏的小品」

入賞者の声

第一位 木下 靖子（鳥取県米子西高等学校）

審査発表で 1 位の時に自分の名前を呼ばれて私は嬉しくて思わず天を仰きました。しかしあれから数日、色々な人に賞賛をいただいていますが、その度嬉しいという感情と相反する不安感が私を襲います。本当に素直に嬉しいのですが、その喜びに浸りすぎて現在の自分に欠けている物を見失いそうでとても怖いのです。今、やっとスタートラインに立つ事ができたのだと思っています。

色々な審査員の方々から書いていただいた『今後さらなる構造を』という言葉を常に考え、初心に戻りより一層努力を重ねようと思いました。

そして、将来 M. ベック氏のような世界のトップサミットに認めていただけるようなプレーヤーになりたいと思います。

最後になりましたが、今回のコンペティションに当たり技術面でご指導いただいた箱山先生、竹田先生、小田桐先生、精神面で支えてくれた親友、後輩、そして全てのことに協力してくれた家族には感謝しつくせません。

本当にありがとうございました。

靖子の T b 人生これからです。

第2位 山下 友輔（鹿児島市立吉野中学校）

初めての出場で遠くから来たので、『せめて予選だけは通過したいな』と思っていました。会場に着くと、周りはみんな高校生だったので、とても不安でした。

予選では緊張し、音が震えたり、はずしたりしてしまったが、通過できて「ほっ」としました。

僕の演奏したギルマンの交響的小品は、分かりやすくかっこいい曲でとても気に入っています。カテンツなど速い動きが多く、音が抜けたり音程が悪くなったりしやすいので、そこを重点的に練習しました。一番

高いハイC♯は、練習を始めたころは、全然音が出せなかつたのでどうしようかと思つたけど、今では何とかだせるようになりました。

本選では、自分の力を十分に發揮でき、悔いの残らない演奏が出来たので満足感でいっぱいでした。また、結果も初出場で2位に入れうれしさでいっぱいです。

大会終了後「君の演奏、感動したよ、これからも頑張って下さい。」と声をかけて下さった方がいました。これからも感動してもらえる演奏を目指し、練習に励みたいと思います。

第3位 清水 真弓（慶應義塾湘南藤沢高等部3年）

「我々はトロンボーンという手段によって『音楽』というものを伝えているんだ」

私の尊敬する師の言葉です。

私は常にこの言葉を念頭においてトロンボーンを吹いているのですが、決してコンクールという場であっても例外ではなく、このコンペティションでも「自分の音楽」というものを表現することに努めました。今回ボザのバラードを吹くに当たり、私が最初にしたことは、譜面をさらうことではなく、学校の図書館でフランスの風景を調べること

でした。イメージを持ち、作者の意図を考慮し、構成を考え、自分なりの音楽を築き上げたつもりです。選曲が自分の技術レベルを大きく上回り、技術力のなさゆえに自分の音楽が出し切ることが出来たかは不安でしたが、このような結果を頂くことが出来て光栄です。

しかしコンクールで入賞することは、自分の努力に対して付いてくる結果であり、励みであって、音楽の最終目標ではありません。決してこれに満足せず、このような場を通じて自分の音楽をさまざまな視点から磨き上げ、更なる飛躍を遂げたいと思っています。

審査に当たってくれた先生方、スタッフの方々、本当にありがとうございました。

また、私がトロンボーンを深く愛せるようになったのは、たくさんの人々の支えが在ったからこそです。楽器のことだけでなく「音楽」に対する向き合い方を教えて下さった先生、私を受け入れてくれ、ともに励ましあった仲間達には、感謝の気持ちでいっぱいです。

このコンペティションがこの先、コンクールとしてだけでなく、新たなトロンボーン仲間との「出会い」の場としても大きな存在となり、より多くの人々にトロンボーンという楽器が愛されることを願ってやみません。



Yasuko Kinoshita



Yusuke Yamashita



Mayumi Shimizu



Michel Becquet



事務局からのお願い

住所変更？

まもなく入学・卒業・進学・就職の季節です。

住所変更のお届けは忘れずに

事務局へ

編集担当からのお願い

トロンボーンに関する催し・コンサートなど
日本国内外かわらずこのインフォメーション
コーナーに掲載いたしますので、どうぞ御遠慮な
く情報を寄せ下さい。

連絡・お問い合わせ

日本トロンボーン協会事務局
(郵送に限る)

E-mail : JAT@BrassAvenue.com

ムジカムンダーナトロンボーンアンサンブル

九州 珍道中

郡恭一郎

’99年に発足十周年を迎えた我々ムジカ・ムンダーナ・トロンボーン・アンサンブルは成功裡に終えた4月の定期演奏に続き、去る十月七日から十四日まで九州演奏旅行を行いました。十周年にふさわしい？、演奏旅行？というよりも我々らしい珍道中になってしましましたのでここにご報告したいと思います。ご好評につき、2000年の十月に再び九州演奏旅行を予定しています。更なる我々をご注目下さい。またこれからもご協力を宜しくお願いいたします。新しく我々のホームページが出来ましたので是非ご覧になって下さい。

<http://www1.webnik.ne.jp/~mickichi/>

(プロフィール)

ムジカ・ムンダーナ・トロンボーンアンサンブルは、リーダーであり日本を代表するバス・トロンボーンの名手、東京都交響楽団の井上順平氏を中心に彼の技とその素晴らしい人柄に惹かれ集まつた、非常に個性のある面白いキャラクターの樂團です。

メンバーはクラシック、ジャズにこだわらず、現在それぞれが様々な分野で活躍しています。

特色は、世界的にもほとんど例を見ないソプラノ・アルト・テナー・バス・コントラバス・といったトロンボーン・ファミリーの全てを使用する、数少ないプロフェッショナルの大編成トロンボーン・アンサンブルです。

演奏歴は結成以来、6回の定期演奏会、各地での特別演奏会や、ゲスト参加など様々な活動を行っています。

【メンバー】@は九州公演・参加メンバー

@井上順平：東京都交響楽団、武蔵野音楽大学講師、日本トロンボーン協会常任理事

@井口有里：東京シティフィル

大川真紀夫：東京ブリリアント・プラス

@国井萌野：洗足学園音楽専門講師

@郡恭一郎：シエナ・ウインド・オーケストラ樂員代表、昭和音楽大学及び國立音楽院講師、日本トロンボーン協会常任理事

@堂本雅樹：原信夫とシャーブス＆フラツ、國立音楽院講師

@中村勝生：アンサンブル・ブリランテ

@沼田司：ビビット・プラス・トウキョウ

比嘉一博：松本文男とミュージック・メーカー

澤野辰之・佐久間健二：陸上自衛隊音楽隊

@尾段好美・国田雅裕・下里高志・@津崎知之・@福井実

鐵・@堀川和美・梁井伸一

@尹富弘 以上フリー

九州 珍道中！？

・ムジカムンダーナ九州公演ツアー・

出発日

確かに東京は寒かった。メンバー全員何

の疑いもなしにそのままの格好で九州に乗り込んだ。宮崎空港に降り立つと目の前にはフェニックスが立ち並び、いかにも南国といった雰囲気を醸し出していた。暑かった・・・。

我々を迎えてくれた宮崎大学の個性的な面々は、「お疲れ様です。本番まであと二十分です。」という言葉を残し、

事務的に楽器やら荷物やらを車に詰め込み始めた。**九**

州はきびしかとこですばい。というの
が第一印象だった。

宮交シティに到着したのは、本番五分前を切っていた。どうにもならない状況のなか、係りの人は無情にも「そのままの格好で結構ですから、本番よろしくお願ひします。」と、楽屋を飛び出して行った。

ご存じの通り、金管樂器は個人差はあるが多少ウォーミングアップというものが必要である。いきなり百メートル走は全力疾走できないものである。おかげでこの日は初日からテレビ宮崎のライブ収録も入っていたので、「初っぱなから焦った演奏ではさい先が悪すぎる」と我らがボス井上順平氏の一言で、十五分おして第一回目のイベントの本番が始まった。

郡氏のMCもバリバリの宮崎弁で、水を得た魚のような勢いでいた。それでもラーステージイベントをやり、全員クリニックのために小学校、中学校、高校、大学へと移動した。

そしてその日の宿は、なんと**産婦人科**の病棟だった。・・・というのも、この前週の宮崎・台風大直撃の為、当初の仕事の予定が大幅に狂ったり、その他色々なこ

とが重なり最悪にも宿泊するはずのホテルまでがキャンセルになってしまい、急遽郡氏の実家（たまたま改装準備のために外のみしかやっておらず、病棟が空いていた）に宿泊することになったのだ。各々新生児用のベッドに荷物をのせ、（乗つかったアルト・Tr bが妙にかわゆい！。）長かった一日がやっと終わった。我々の珍道中は、今考えるともはやこの日に楽しんでいたのだった。

翌朝

宮崎放送の朝の番組に生出演するために朝五時半起床。朝八時から High Es 運営のサウスランパートを三回通し本番。体操にたとえると、寝起きにパク転を四回やるようなものである。宮崎放送のスタジオを後にすると、前日の宮交シティで二ステージのイベントをやり、その後急遽NHKのニュース番組の取材を受けることになり、またまたサウスランパートを吹いた。

後で気がついたのだが、宮崎にある全テレビ局を我々は制覇してしまったのだ。最後に野外フェスティバルに出演し、その日の全日程を終えた。打ち上げは宮崎牛の焼き肉だった。あまりのおいしさに疲れも忘れ、食べまくり飲みまくった。

3日目、前日飲み過ぎたFとKは早くも二日酔いでダウンしたが、サクロンを飲んで昼前にはなんとか持ちなおした。その日は三日目にして初のホール・コンサートである。G・P・在一時間ほどやり、本番は満員御礼のなか、宮崎出身の郡氏がロンドンテリーのソロを吹き故郷で錦を飾った。そして、その夜はジャズバーでライブに出演し、宮崎最後の夜を過ごした。郡氏、堂本氏、津崎氏はその後もバーに残りアドリブ大会に参加した。まったく元気な三人であった。

4日目宮崎を後にし、飛行機で福岡へ向かった。

中洲の明治生命ホールで堤隆夫氏と、ジャズ界の重鎮、辛島文男雄氏とのジョイントコンサートで、一部は我々のステージ、二部は堤氏のCDデビュー記念リサイタル、三部は辛島氏のソロと我々のジョイントでのジャズナイトというおもしろい構成で行われた。この日は一日一回本番ということで、メンバーの間ではどことなく楽勝ムードが漂っていたが残響時間の秒のホールに悩まされ、やは

り九州はただものではなかばい！
と感じたメンバーであった。

翌日は電車で井上氏の故郷である風光明媚な佐賀の浜玉町まで、それぞれ大きな荷物を持って移動した。浜玉町に着くと、旅館にいき、ひと風呂浴びて、その日の演奏会場：ひれふりランドへ向かった。

一部は我々のクラシックアンサンブル、二部はピアノとコーラス、三部は「酒とバラの日々」（井上氏ソロ）含むトロンボーンアンサンブル、四部はムジカムンダーナとコーラス、そして西組囃子方の皆さんと、近衛秀健氏作詞作曲の「我が町・浜玉」を演奏した。浜玉町の皆さんと我々が一体となった瞬間であった。

翌朝、案の定 青白い顔で現れたKにメンバーは「お疲れさま」と言って壱岐へと出発した。

一時間ほどフェリーに揺られ、壱岐に到着した。温泉付きの旅館に荷物を置き昼食を食べすぐに音楽教室をやり、その足でコンサートのために壱岐文化ホールへ向かった。壱岐文化ホールはとても書きの良いホールで、最後のコンサートということもあって、熱の入った演奏となつた。

次の日は朝から近くの小学校で一時間の音楽教室をし、老人ホームでのイベントを二回、そして高校のクリニックをして、九州旅行最後のお仕事を終えたのである。

最終日

Hは仕事のため朝一番のフェリーで東京へと帰っていった。その他のメンバーはイルカと泳ぎに行ったり、市場にうにを買いあさりでかけたりして、壱岐を思う存分観光した。そして、壱岐での最後の晚餐は、うに、あわび、ふぐ、伊勢エビと、こんなに黄沢をしていいのだろうかと思うくらいの豪勢な料理だった。Hはとても惜しいことをしたものだ・・・。

長かったような短かったような一週間でしたが、すばらしい人々との出会いもあり、本当に充実した日々を送ることができました。最後に、この演奏旅行にご協力下さいました方々に感謝いたしますと同時に、またこのような演奏旅行で皆様とのふれあいが出来る事をメンバー一同願っております

E-mailでのお問い合わせ、ご感想、ご意見等は こちらまで。

boohong@mail.webnik.ne.jp

ムジカ・ムンダーナ・トロンボーンアンサンブル
宮崎に来る！ 1999.10.8-9

プロのトロンボーン奏者で構成する「ムジカ・ムンダーナ」（宇宙の音楽を意味するラテン語）の12人のメンバーが、このたび宮崎を訪れ、多彩な活動を繰り広げられました。今回は、初めての九州公演の一環として宮崎を訪ね、学校での音楽教室、トロンボーンの個人・グループレッスン、テレビ出演、宮交シティーでの演奏、県庁前楠並木コンサートでの演奏、清武文化会館でのメインの「コンサート」、そして写真の、ライブハウス・ライフトイムでの演奏と、ほんとうに精力的な演奏を披露していただき

ました。

このグループは、東京都交響楽団の井上順平氏をリーダーとして構成されており、日本唯一の大編成プロ・トロンボーン合奏団です。私は今回の公演のうち、楠並木コンサート、清武コンサート、ライフタイムコンサートを聴いたのですが、トロンボーンだけの演奏なのに、クラシックからポピュラー・ジャズまで実に多彩な演奏を繰り広げ、トロンボーン関係者だけでなくとも非常に楽しめる内容でした。私は個人的には、やはりクラシックのアンサンブルが最も興味深く、その中でも、ジェルペーズのフランクルネッサンス舞曲が一番好きでした。ソプラノトロンボーンから、コントラバストロンボーンまで使う演奏は、そう滅多に聴けません。アルトトロンボーンの輝かしい音色が印象的でした。それにしても、一人一人の技術レベルの高いのには驚きました。

中心メンバーの「郡 茂一郎」氏は、宮崎市出身で宮崎シティフィルで一緒にトロンボーンを吹いている斎藤氏とは同級生です。郡さんは、クラシックは私の最も好きな小田桐 寛之氏（都響首席）に師事し、ジャズは日本No.1の向井滋春に習われ、クラシック・ジャズの双方を高レベルでこなす日本でも数少ない奏者の一人です。なんと、郡さんが中学生の頃、宮崎交響楽団の「石丸寛ゴールドブレンドコンサート」で私は一緒に演奏会に出たことがあります。宮崎県出身のプロ奏者として、今後も大いに活躍していただきたいと思います。

来年も是非宮崎でムジカ・ムンダーナのコンサートが開かれますよう、期待しています。

（宮崎市・杉田 賢一郎）

ムジカ・ムンダーナホームページ：

<http://www1.odn.ne.jp/~basta/mundana.html>

郡 茂一郎さんのホームページ：

<http://www1.odn.ne.jp/~basta/kk.html>

（主なプログラム）

グリーグ：

ホルベルク組曲よりプレリュード

バッハ：イタリア協奏曲

ワーグナー：

エルザの大聖堂への厳かな行列

ジェルペーズ：

フランス・ルネッサンス舞曲集

水口 透編曲：

ディズニー・メドレー

団子・タンゴ・メドレー

宇多田ヒカル・メドレー

津崎 知之編曲： A列車で行こう

サテン・ドール

黒田武士

フェニックス・ハネムーン

演歌の名曲より

ロンドンテリーの歌・ミスティ

(Tuba Solo: 郡 茂一郎)

酒とバラの日々 (Bass Tuba Solo: 井上 順平)

ベダーソン編：

サウス・ランパート・ストリート・パレード

線路は続くよどこまでも



（写真上）巣鴨 泰岩の前で（写真下）巣鴨の最終日の打ち上げで



ドイツトロンボーンの名工

多湖 和男

今回は、ヘッケルに大きく影響を受けた製作者G・A・ワーグナーとヘッケル／ヴィンティッシュの工房を引き継いだベルント・C・マイヤーについてご紹介します。

● Gustav Adolf Wagner

ヘッケルに影響を受けたマイスターは、先日ご紹介したR・ショッバーやヘッケル工房における戦前最後の弟子と言われるE・ラング他にもいますが、ヘッケルの製作哲学・コンセプトを大きく取り入れた製作者の代表として、グスタフ・アドルフ・ワーグナーを取り上げます。

ワーグナーは、F・A・ヘッケルのもとで一緒にトランペット製作に携わっていたほかに、アレキサンダー社（マインツ）、F・A・シュミット（トランペット製作で知られるケルンのJ・モンケの師 L・A・シュミットの父親）、J・アルトリヒター（フランクフルト・アン・テア・オーダー）でも職人として修業を積んでいます。

1904年にドレスデンのエッセンバッハ一族最後の製作者カール・モーリッツ・エッセンバッハの工房を買い取り、自分の工房をここドレスデンに構えます。工房では二人の息子リヒャルト・グスタフとクルトも職人として働いていました。また、リヒャルト・グスタフは、1930年代後半より自分の名前の彫刻入りで楽器を出していました。彼には次のような逸話が残っています。3代目テオドール・アルヴァン・ヘッケルの死後、ヘッケルの奥さんから工房を引き継いではもらえないかと話を持ちかけられたが、高齢でもあることからその申し出を断ったということです。（この話が事実であるか否かはわかりませんが、当時の政治体制下では、まず工房の引き継ぎは無理であろうとされています。）

ワーグナーは、ヘッケルの偉大さの陰に隠れてしまい、彼の楽器の素晴らしさを知る人は多くありませんが、優れたマイスターの一人であることは間違いないかもしれません。ヘッケルのコンセプトを独自に発達させたワーグナーの楽器の響きは、ヘッケルより直線的で力強いものを持っています。ヘッケル同様トランペットを中心に製作していましたが、トロンボーンはヘッケルよりも多く存在していると思います。また、価格においてもヘッケルやクルスベ程の高値ではないと思います。

● Bernd C Meyer

ベルント・C・マイヤーは1963年5月に東ベルリン近郊に生まれ、6才からピアノ、13才よりホルンをはじめました。ドレスデンのカール・マリア・フォン・ウェーバー音

楽学校で、Prof. ベーター・ダムに師事し、卒業後は演奏活動をしていましたが、マイスターである叔父のヴォルフガング・ヴェンケの影響を受けて楽器製作の修業をはじめます。その後マイスター資格を取り、ドレスデンにて独立します。マイヤーはドレスデンの伝統的なヘッケルなどの楽器に非常に興味を持ち、伝統的な手工業により作られたこれらの楽器に新しい技術を融合させることを研究していました。1996年6月にアルノ・ヴィンティッシュより後継者として指名され、現存するヘッケルの工具一切を彼より受け継ぎ、同時にヘッケル、ヴィンティッシュの名前使用の権利を有し、名実ともにヘッケル／ヴィンティッシュの後継者となり、今後が注目されるマイスターです。

私は、昨年11月ヤマハ銀座店の招きにより彼が2度目の来日をした際に、色々な話を聞くことが出来ました。その中でもトロンボーン製作について、私が非常に興味を引いたことを書きます。

今日ではトロンボーンのインナースライドに硬質クロームメッキをかけることは当たり前のことがですが、他の金管楽器では全長に対してあれだけの長さ分相当の内管表面にクロームメッキをかけているものではなく、このクロームメッキをかけることは、音色・響きの観点からすると不自然なこととも考えられると語りました。

硬質クロームメッキを掛ける理由には、管厚を補い、マテリアルの保護、高度と耐久性を高め、外観との摩擦抵抗を少なくすることがあげられます。彼はヘッケルの響きを再現するためにインナースライドの管厚を当時とほぼ同じのコンマ3ミリ以下にし、響きの観点から硬質クロームメッキはあえてストッキング部分だけか、掛けないことを考えているとも語っていました。「メッキを掛けると響きが（主観的に）固い傾向になり、ヘッケル独特の柔かで倍音豊かな響きを再現する妨げにもなる」とのことです。

また、メッキを掛けないことやインナースライドの管厚が薄いことで、どんなに精巧なスライドを作っても、アウタースライドの量みでインナースライドがしなりスライドアクションのスムーズさが若干欠けるのを、アウタースライドの支柱をルーズフィッティング（スライドの支柱の一部をハンド止めしないもの）にすることによって解消するとのことです。考えてみれば、クルスベなどドイツの名工達は1960年代半ばまでは、このようなコンセプトでトロンボーンのスライドを作っていたのでした。さらに、戦前より現在の方がマテリアルの品質が良く、管の引き抜き技術なども進歩しているため、実用・操作性に問題はないとのこと。

このようなところにもこだわりをもって製作していくこ

とする彼は、単なるヘッケルの復元・コピーではなく、ヘッケル／ヴィンティッシュ工房の後継者として、ヘッケル自身の製作哲学を探求し、それを重視したうえでプレイヤーのニーズと機能・操作性の融合を目指した楽器製作を行っていきたいと考えているようです。

確かに、時代のニーズをどのように融合・反映させていくかは、作り手の製作哲学・理念によるところが大きいと思います。いくら設計や寸法・材質が同じであっても、製作哲学の違いは作り手のオリジナリティーとして楽器に現れると私は思います。事実ヘッケルの楽器（特にトラン

ペット）はたくさんのメーカーにコピーされていますが、どのメーカーのものをとってもオリジナルのキャラクターと全く同じものはないと思います。この全く同じでないことにについて、そのメーカーが復元・コピーをうまく出来なかつたと見る方もいらっしゃいますが、私はこの全く同じでない事実こそが作り手の製作哲学・理念の違いなのだと思っています。

今後・マイヤー氏がヘッケルの製作哲学と彼自身の考え方、時代のニーズをどのように融合させていくのかを、私は注目していきたいと思っています。

1999秋のサンフランシスコ・ラスベガスレポート

村上準一郎

毎年11月か10月の第一土曜日と日曜日で76のトロンボンプラス4（4人のゲストの意）というコンサートがラスベガスで行われている。

名古屋在住のトロンボーン奏者 森下秀三氏から何年も前から聞いて知っていたし、彼と共に友人でありサンフランシスコでペイボーンズという大編成のトロンボーンアンサンブルを組織するビリー・ロビンソン氏からも誘われていた。

毎年有名なジャズトロンボーン奏者 カール・フォンタナが出演しているということで生で演奏を聴きたくてアメリカに行くことにした。

11月3日 午後10時頃 サンフランシスコ空港に到着、ビリー・ロビンソン氏（以下ビリー）が、一時間遅れて迎えてくれた。昼食をとりにテニーズに入った。日本とは違い大きなハンバーガーショップという感じ。そこで迎えてくれたのはサンフランシスコで活躍しているバストロンボーン奏者 ティック・リラント。

彼の演奏はビリーからもらったBigBandのCDで聴いて知っていた。名人である。彼の持っている色々な楽器について話してくれた。コーヒーには3つも砂糖を入れていた。

ビリーと同じく70才近い彼は現役プレイヤーである。

CONNBBHにバストロンボーンのようなマウスピースを入れてコントラバストロンボーンのためのソロも吹きこなしてしまう。

ティックと別れテニーズを後にしビリーの勤めるスカイラインカレッジへ向かった 小高い山の丘に広大な敷地を持つこの大学はおりからの霧にすっぽりと包まれスカイライン（稜線）は見えなかった。

カレッジではジャズトロンボーン奏者ビル・ワトラスのクリニックが行われていて小学生から大人までいろんな人（トロンボーン奏者以外も）が参加していた。

大学主催だが誰でも自由に聴講できるのだ。ビル・ワトラスが「おう、ビリーロビンソンが来てる」と声をかけた。ビリーは西海岸のトロンボーン界では有名人なのだ。

夜はクリニックで会ったビリーの友人 デビッド梅本氏のお宅のディナーに招待された。高級住宅街にある白亜の邸宅はらせん階段のある大きなエントランスがあり 広々とした居間ではホームコンサートも開いているとのことだった。

翌日は少し朝寝をし昼頃、ビリーとスカイラインカレッジへ行って昨日あったクリニック・リラント氏ともう一人かなり年輩のトロンボーン奏者と4人でアンサンブルをした。日本で見る雰囲のほかに出版されていない特別なアレンジのものも何曲もあった。

アンサンブルは大学のオーケストラ練習用の大きな教室で行ったのだが、この教室の横の倉庫はビリーの膨大なコレクションの山だった百本近いさまざまなトロンボーン（ニューヨークバックを中心に）の数々。ソロやアンサンブルの譜面も戸棚という戸棚にしまってある。

ビリーのトロンボーンに対する愛着が感じられる場所であった。

夜はダウンタウンにある紳士クラブ“ボヘミアンクラブ”へ行くというので一度ビリーの家に戻りシャワーを浴



びてからネクタイをして出かけた。

車をパーキングビルに停めて2-3ブロック歩いた。一路上のパーキングメーターはすべてふさがっていたのだ――

そのクラブは古めかしいが格調あるビルディングだった。通りから数段の階段を上るとホテルのようなロビーがあり クローク

に荷物を置いて
(この建物内は撮影禁止なのでカメラバッグを預けたのだ) マホガニーの壁の廊下を進んだ。

突き当たって左側の部屋がとても賑やかだったそこはラウンジで大きな天井の高い長方形の部屋で入り口とは反対側にある



(L→R ティック・リラント ビリーE・ロビンソン 村上准一郎)

長方形の長い辺のすべてが20メートル以上のバーカウンター、2つの短い辺に当たる壁際にはソファとテーブルと椅子、フロアには丸テーブルと椅子がゆったりと置かれている。

ダークブラウンの壁といい、それに所狭しと掛けられている大きな絵の数々といい 格調の高さとともに楽しむ心をそこに集う人々に与えてくれる。

廊下の反対側にあるもう一つの大部屋に入つて驚いた。じゅうたんの敷き詰められたその部屋には暖炉やソファ、小さなテーブル、テーブルスタンドなどがあり 巨大なリビングなのだが、部屋の真ん中には5~60人規模の吹奏楽の譜面台、譜面、譜面灯、椅子、打楽器が整然と配置されていたのだ。

そのセッティングがプロの仕事だということは一目で分かった。

その階の少し奥の部屋には スナックをつまめる小さな部屋とその奥に高級レストランの気品を備えたダイニングルームがあった。

このクラブにある調度品のすべてが重厚で本物の風格を持っている。

ビリーに案内されてエレベーターで地下に降りると楽器庫がありビリーは自分のキングの48テナーバスを取り出した。それを持って1つ階を上るとそこにも大きな部屋があり ビッグバンドが練習していた。トロンボーンセクションには1人しか奏者がいなかつた。ビリーが「ジョンイチロウ この48で吹いていろ。君のバストロンボーンを車まで取りに行ってくるから。」と私をビッグバンドに参加させてくれた。バンドのメンバーは50代 60代

70代がほとんどだ。

音を聴いているとアマチュア・プロの混成だ。

リードトランペットがバラードを吹いたが素晴らしいかった。それもそれはず ベニーカーター・バンドで何度か来日の経験もある アラン・スミスだった。

2~30分してビリーが私のヘルムートフォイクトを手に戻ってきた。そして自分の48とともにバンドに加わった。

リハーサルの後私のドイツ管ヘルムートフォイクトはその美しさのゆえにメンバーの興味をひいた。

吹奏楽のフロアに戻るとリハーサルはすでに終わっていた。楽器を暖炉の薪の横

に立ててラウンジに行くとリハーサルを終えた人々が食事をとっていた。彼らは食事中でも常に何かの話題が分からぬがぎらっている。じつにリラックスした場所だ。

ビリーと吹奏楽のメンバーに加わって食事を取り2階でアカペラコーラスのコンサートをやっているというのでエレベーターに乗った。

そこにも巨大な部屋があった。カーテンのあるあまり大きくないステージとプロの音響機、照明機に作り上げられたコンサートが行われていた。

グレゴリオ聖歌のような宗教曲、のどかなカントリーソング、軽快なジャズコーラス、etc...

アマチュアとは思えない高いレベルのコーラスを聞かせている。冗談めいたもの、シリアルなもの、さまざまなグループが思い思いの趣向で登場する。そして聴衆(ほとんどが会員)を楽しませている。いや聴衆とともに楽しんでいる。

ジャズコーラスのあるグループはエンディングで複雑なコードでハモリそのままグリッサンドで上昇しエンディングコードを決めた。そのようなコーラスをそれまで聞いたことはなかった。スゴイ。

毎週木曜日にしか開かないこのクラブには会員全てがくつろぎ、自分の趣味を満喫できる環境が高いレベルで整っている。

クラブが会員を温かく丁寧にもてなすというディズニーランドのような精神が徹底している。実に素晴らしい文化に接することができた。

ラスベガスでの76本のトロンボーンコンサートまでは今は書き及ばなかつたことをお許し願いたい。

次号にて、乞う御期待。

トロンボーンの超人！ 真のアートパフォーマー！ 世界の聴衆を圧倒する天才ソリスト！
常識を遥に越えた超絶技巧と息継ぐ間もない魅力的なパフォーマンス！

クリスチャン・リンドバーグ

Christian Lindburg

2/7、8 紀尾井ホール 19:00

(月、火) 共演: 紀尾井シンフォニエッタ東京 指: 尾高忠明
武満徹／ファンタズマ／カントスII

S席 ¥5,500のみ → ¥4,950

問: プロアルテムジケ 03-3943-6677

2/11(金) 葛飾シンフォニーヒルズ 17:00
(ココダケのリサイタル)

S席 ¥4,000 → ¥3,600

A席 ¥3,000 → ¥2,700

B席 ¥2,000 → ¥1,800

問: プロアルテムジケ 03-3943-6677

2/14(月) サントリーホール バレンタインコンサート
プロコフィエフ: モオとジュリエット ラヴェル: ポレヨ
問: サントリーホール 03-3505-1001

2/16(水) 紀尾井ホール 19:00
共演: 日イヤルチュリ-オーケストラ 指: 堤俊作
料金: S席 ¥5000 A席 ¥3000 B席 ¥1500
問: 事務局 03-5443-5031

今年もやって来る!!

第4回トロンボーン・アカデミー & フェスティバル

共催: 北区文化振興財団

■アカデミー

豪華講師陣による丁寧な指導で実力アップ間違いなし!!

2000年3月18日(土)～20日(月) 北区滝野川会館

受講料: 一般: 28,000円/JAT会員: 20,000円/高校生以下: 15,000円

内容: 個人レッスン、中上級者グループ、初心者/初級者/小中学生グループ、ジャズの4部門

講師陣: 三輪純生(桐朋音大講師)白石直之(東京音大講師)原田靖(ジャズ)箱山芳樹(日本フィル)

山田裕治(東京吹奏楽団)亀谷彰一(日本フィル)郡恭一郎(シェナ・ウインド)他

■トロンボーン・フェスタ

新進作曲家によるトロンボーンのための貴重な新曲
楽しいガラコンサート

2000年3月19日(日) 5:00pm開演/北区滝野川会館 共催: 日本現代音楽協会

全席自由: 一般: 2500円(当日3000円) 学生・JAT: 2000円

プログラム: 大内邦靖: システム7/松尾祐孝: 12重奏曲 他

出演: 神谷敏、五箇正明、大内邦靖、村田厚生 他

協賛: 河合楽器製作所、グローハル、真田貿易、下倉楽器、ダク、野中貿易、ブリマ楽器、ブージー・アンド・ホークス、山野楽器、ラ・ボザウネ(他予定)

問 ■ プロアルテムジケ 112-0013 東京都文京区音羽2-2-2-603

Tel. 03-3943-6677 Fax. 03-3943-6659 email: pam@proarte.co.jp



JAPANESE ASSOCIATION OF TROMBONISTS

日本トロンボーン協会 イベント・インフォメーション

JAT Information 1999.11-12

いよいよ西暦2000年!! 日本トロンボーン協会&北区文化振興財団主催 トロンボーン・アカデミー&フェスティバルのお知らせ

好評のアカデミー&フェスティバル、2000年はこの日程です!初心者も大歓迎!

期 間 : **2000年 3月18日(土)、19日(日)、20日(月祝)**

場 所 : 北区滝野川会館 (JR駒込駅、上中里駅下車)

講 座 : 個人レッスン・じっくり一対一で実力アップ

グループレッスンA・オケスタ、アンサンブル受講希望者を含む中上級者

グループレッスンB・初心者、初級者、小中学生等

ジャズ・ジャズ全般



アカデミー最終日(20日)受講生出演の**大発表会開催!!**

ソロ、アンサンブル、ジャズの大ジャムセッションで受講の成果を発表しよう

講 師 : 三輪 純生、白石 直之、首藤 健一、原田 靖、箱山 芳樹
伊波 瞳、村上 準一郎、山田 裕治、亀谷 彰一、郡 恭一郎 他

日本現代音楽協会&北区文化振興財団共催

トロンボーン・フェスタ 19日 17:00~ 北区滝野川会館

新進作曲家によるトロンボーンソロ、アンサンブルのための貴重な新曲

楽しいアンサンブル作品からアヴァンギャルドまでのガラ・コンサートです

プログラム:

松下倫士 トロンボーンとピアノのための「艶艶」

小林新 ソロ・トロンボーンのためのディベルティメント

伊藤弘之 Shadows of Night 2

角田健一 REQUIEM

後藤國彦 inquisition/cloister 「野分の門」

藤井喬梓 Dancing Bones

大内邦靖 システム7

伊藤高明 CLOSE TO THE EDGE-

川崎美保 The short story for three Trombones

早川正昭 イントロダクションとアレグロ

寺島正悟 Trombone Quartet

松尾祐季 12重奏曲

出 演:

神谷敏(N響)、箱山芳樹(日本フィル)、池上亘(東京交響楽団)

下島昌史(東京フィル)、五箇正明(新星日響)、田中宏史(フリー)

大内邦靖(フリー)、村田厚生(フリー)

東京藝術大学、武蔵野音楽大学、国立音楽大学 及び

東京ミュージック&メディアアーツ専門のトロンボーン科学生

レントラートロンボーン4重奏団 他

※アカデミー&フェスティバルの詳しい内容、お申し込みは12月末発行のチラシをごらんください

〒112-0013 文京区音羽2-2-2 アベニュー音羽 603 プロアルテムジケ内 日本トロンボーン協会事務局 TEL:03-3943-6677